

Kṣāranadī という謎の經典について

津 田 明 雅

Nāgārjuna 作とされる讃歌に *Sattvārāḍhanastava* がある。チベット訳の奥書きによれば、これは **Kṣāranadī* という經典を作者が偈頌の形でまとめた、あるいは単に抜き出したものだという。しかしながら *Kṣāranadī* という經典は現在に伝わらず、不明な点が多い。本稿ではこの經典の正体を明かすべく、諸論書での引用箇所を中心に検討する。

Sattvārāḍhanastava に関してはすでに拙稿（「*Sattvārāḍhanastava* について」, *Acta Tibetica et Buddhica*, 4, 2011, pp.73–108）にまとめたので、詳細はそちらに譲る。先行研究のうち、Hartmann 氏の論稿¹⁾では諸研究がよくまとめられており、注釈書や問題の經典の引用典籍等も新たに挙げられ、今後の解明に向けて多くの手がかかりがえられる。本稿はこれに多くを負っている。

まず奥書きの記述を確認しておきたい。2つあるチベット訳のうち1つでは、

Byaṅ chub sems dpa'i sde snod *Ba tshva'i chu kluṅ* zes bya ba'i luṅ las bcom ldan 'das kyis ṅan thos chen po bcu drug la bka' stsal pa / *Sems can mgu bar bya ba'i bstod pa* slob dpon Klu sgrub kyis tshigs su bcaḍ pa'i sgo nas bsdus pa rdzogs so // // (P no.2017)

菩薩藏『塩の河』という經典から、世尊が 16 人の大声聞たちにお話しになった、**Sattvārāḍhanastava* という、師 Nāgārjuna が偈頌の形でまとめられたものを終わる。

とある²⁾。また、冒頭の数偈が欠けるサンスクリットが得られるが、そこでは

samyaksambuddha-bhāṣitaṃ *Sattvārāḍhanam* nāma mahāyānasūtrāntaṃ samāptaṃ // ³⁾

正しくさとした方が説かれた、*Sattvārāḍhana* と名づけられる大乘經典を終わる。

とある。ここからは、これ自体が大乘經典だということになる。

「大乘」という点は、利他の心を説き、「[六] 波羅蜜」（第 7 偈）や「四無量心」（第 8 偈）を説くという、大乘に特徴的な内容となっていることから明らかである。no.2017 の奥書きにある「菩薩藏」ということばは、上記の点と併せ、本テキストが現存の『菩薩藏經』（大正 310 (12), 310 (17), 316, 1491) 中に見い出せないことから、広く「大乘」を指したことばと解釈するのが妥当であろう⁴⁾。

さて、‘ba tshva’i chu kluṅ’ は ‘kṣāranadī’ (塩の河、塩分のある河) というサンスクリットが想定される。この河は一体何をさすのか、文献上で確認してみたい。

先行研究でも指摘されるように、地獄の河にこれに相当するものがある。『俱舍論』によれば、八熱地獄には地獄ごとに4つの門があり、それぞれの外側には4つの「増」(utsada)といわれる付随的地獄が存在する。これら付随的地獄の第4として「塩水 (kṣārôdaka) で満たされた河」といわれる地獄があるのである。Abhidharmakośa III-19 に対する Vasubandhu の注釈に “catūrtha utsado nādī vaitaraṇī pūrṇā taptasya kṣārôdakasya ...”⁵⁾ 「第4の付随[的地獄]は、熱い塩水で満たされたヴァーイタラニー河である」とある。ここで「塩水」と訳した ‘kṣārôdaka’ は、漢訳では「鹹水」(大正1558, p.58c9)、「灰汁水」(大正1559, p.216a3)とされる⁶⁾。

次に、‘kṣāranadī’ に対するチベット訳を検討する。Vasubandhu は Mahāyāna-sūtrālamkāra に対する注釈中で Kṣāranadī という經典を引用するが、チベット訳では “Chu bo tshva”⁷⁾ sgo can gyi mdo las /”⁸⁾ 「『塩をもつ河』という經典に」とあり、また Vasubandhu 注をふまえた Sthiramati の注釈では、この個所への注釈部分 (Skt: uktam Kṣāranadyām) が “Ba”⁹⁾ tshva’i ‘bab chu bśad pa zes bya ba’i mdo las /”¹⁰⁾ 「『塩の河を説く』という經典に」と訳される。ここでの bśad pa は uktam 「～と[經典に]述べられる」を經典名に含めて訳したものであるが、これは翻訳上の誤りであって、Kṣāranadyām に対応する訳は ‘Ba tshva’i ‘bab chu ... las’ である。‘kṣāranadī’ に相当する語はこのほかに4箇所あり、それぞれ ‘chu lan tshva can’, ‘chu bo lan tshva can’, ‘ba tshva’i chu bo’, ‘ba tshva’i chu bo’¹¹⁾ と訳される。これらのチベット訳から、‘kṣāranadī’ の語はさまざまに訳しうることが確認できる。

Candragomin 作の讃歌に対する注釈 Deśanāstava-vṛtti には、Lan tsha’i chu bo’i mdo という經典が引用される。Tatz 氏はサンスクリットを *Lavaṇanadisūtra と想定するが¹²⁾、以上より *Kṣāranadisūtra も1つの有力な候補といえる。

実は、「塩の河」の喩えをもつ經典が漢訳に存在する。『雜阿含經』中の第1177經(大正99, pp.316c23-317b16)である。この經典では、灰河を遡って岸に上がり高みにまで登った者が他の漂流者に河から出るように呼びかけるさまが、菩薩道を実践した釈尊がその弟子や六師外道とやりとりするさまを喩えたものとして説かれる¹³⁾。ここに出てくる「灰河」の語が ‘kṣāranadī’ に相当するといえ、1177經は ‘kṣāranadī’ をタイトルとするにふさわしい經典であるといえる¹⁴⁾。

その中の「微見小明者、謂得法忍」(p.317a27)を引用するのが、Mahāyānasūtrālamkāra XIV-23-26 に対する Vasubandhu の注釈だと考えられる¹⁵⁾。

(126)

Kṣāranadī という謎の經典について (津 田)

ayam sa āloko yam adhikṛtyōktaṃ *Kṣāranadyām* /

āloka iti dharma-nidhyāna-kṣānter etad adhivacanam iti / ¹⁶⁾

それは、それに関して『塩の河』に説かれるところの、この「明かり」である。

「明かり」とは、これは、ものごとの見方を受け入れることに対して「用いられた」ことばである」と。

Sthiramati の注釈ではこの部分を受けて、次のように注釈される (前半部省略)。

de la *Ba tsha'i chu bo* ni khams gsum du rgyun du 'khor ba la bya'o // *Ba tshva'i chu bo'i* tham pa ¹⁷⁾ tshva'i skye bo la ñi ma'i zer bab na dkar ba dañ skya bar snañ ba de bžin du / gañ gi tshe chos thams cad sems las snañ bar zad kyi / sems las logs śig na yod pa ma yin no źes khoñ du chud pa de'i tshe ñi ma dañ zla ba'i 'od lta bur snañ ba źes ni mi bya'o // chos la snañ ba thob pa źes bya ba'i ¹⁸⁾ don to // ¹⁹⁾

ここでは「塩の河」は「三界における絶え間ない輪廻」に対して言われる。塩の河に満ちた塩「のように多く」の生き物に太陽の光が降り注ぐとき、白く青白く「まるで光そのもののよう」に見えるが、それと同様に、あらゆるものごとは心から現れたものにすぎず、心とは別のところで存在することはない、と理解する時、太陽や月の光「そのもの」のように見えるとは言われない。「これが」「ものごとに対する明かり(見方)を得る」ということの意味である ²⁰⁾。

ここで注釈される内容は 1177 経には明確に説かれてはいない。Sthiramati が 1177 経から敷衍してこのように注釈したのか、1177 経とは異なる『塩の河』という經典があり実際にそのように説かれているのか、不明である。なお、1177 経をふまえた記述のある經典も存在し ²¹⁾、それらのなかにこの注釈内容に一致するものはないけれど、Sthiramati の念頭にあるのはこうした經典かもしれない。

dharmanidhyānakṣānti の語は *Caṅgīsūtra* (= *Majjhimanikāya* 95, *Caṅkīsutta*) をはじめ多くの経論にあることが明らかになっているが ²²⁾、いずれも内容は 1177 経とは異なり、Vasubandhu 注での引用はこれらから直接なされたものではない。

また、*Sattvārāḍhanastava* と 1177 経との間には内容的に共通項は見当たらない。唯一、1177 経の「菩薩摩訶薩」の語は「大乘」という点で共通するといえる。

さらに、次に引用される **Kṣāranadī* も、*Sattvārāḍhanastava* とともに 1177 経ともテキスト内容の異なるものである。すなわち、*Deśanāstava-vṛtti* で次のように 3 度引用される ²³⁾。注釈者は Sañs rgyas źi ba つまり Buddhaśānti であり、8 世紀の人物である ²⁴⁾。(P no.2049, D no.1160, N no.49, C, G no.49 を参照)

de yañ *Lan tshva'i* ²⁵⁾ *chu bo'i* mdo las /

bdag ni nor phrogs rkun po rnam la 'jigs pa yod ²⁶⁾ **min te //**

de dag gis ni nor bzañs²⁷⁾ 'phrog par byed na de yañ yod ma yin //
 yid kyi dge ba'i nor ni legs par rab tu bsags bsags²⁸⁾ pa //
 bdag gi tha mal rnam rtog dag gis²⁹⁾ mñon du 'phrog par byed //
 ri khrod dañ ni mun khañ dag dañ nags ni stug po³⁰⁾ ru //
 nor ni rkun po rnams las 'di ni legs par bsruñ nus kyi //
 gañ du dge ba'i nor ni 'phags min rtog pa 'di yis ni //
 bcom par ma gyur sa phyogs de ni 'gro na yod ma yin //
 zes bsad pa yin no //³¹⁾

それはまた『塩の河』の経に、

「私は財産を盗む泥棒たちに対して怖れはない。彼らがすばらしい財産を盗むならば、それが再びあることはない（それ以上盗まれることはない）。心の徳という財産は、正しく集められ[ても]集められ[ても]、私の低俗な分別（*vikalpa）によって盗まれる。山の洞穴や暗い地下洞や密林で、この財産を泥棒たちからよく守ることができるけれど、徳という財産がこの卑しい分別（*anārya-kalpa）によって征服されてしまわない、そうした場所は世間（*jagat）には存在しない。」と説かれている。

de yañ mdo de ñid las /

ji ltar dañ ba'i chu 'bab³²⁾ rgya mtsho ni //
 mi g-yo dba³³⁾ rlabs kyis ni rab 'khrug byed //
 de bzin rtse gcig gyur ba'i³⁴⁾ sems kyi chu //
 rnam par rtog pas rab tu 'khrug par byed //
 ces bsad pa yin no //³⁵⁾

それはまた同じ経典に、

「澄んだ水の流れこむ海は動きがない[けれど]波によってかき乱されるように、同様に、一点に到った（集中した）心の水は分別（*vikalpa）によってかき乱される。」と説かれている。

de yañ Lan tshva'i³⁶⁾ chu bo'i mdo las /

'di de gus pa thams cad dañ // yon tan rnams ni 'jig byed de //
 gañ gis ri rab ltar lei ba'añ // śiñ bal lta bur yañ bar byed //
 sred³⁷⁾ pas dgun gyi dus su ni // kha ba can yañ grañ ba 'añ //
 mya ñam dag tu ñi ma'i zer // 'bar ba dag kyañ tshar³⁸⁾ mi tshor //
 sred pas gtiñ mtha' med pa dañ // gnod pa du mas ñam³⁹⁾ ña ba'i //
 rgya mtsho'añ glañ rjes tsam ñid du // śiñ tu chuñ ba ñid du sems //
 zes gsuñs pa yin no //⁴⁰⁾

それはまた『塩の河』の経に、

「これはそれらあらゆる敬意や諸々の福德を損なう。[それらは]須弥山（*Sumeru）と同じくらい重いけれど、[それはそれらを]綿と同じくらい軽くする。渴望があると、冬の時期に雪の国（チベット）[で]も寒さが[感じられないだろうし]、砂漠で太陽の光が照りつけても熱さが感じられない[だろう]。渴望があると、底なしで多くの傷つけられることによる不安のある海でさえ、ほんの牛の足跡にすぎないくらい非常に小さ

(128)

Kṣāranadī という謎の経典について (津 田)

いものだと考えられる。」と説かれている。

以上より、Kṣāranadī という経典には少なくとも次の3つのテキストがあるといえる。1) 『雑阿含経』中の第1177経。2) *Sattvārāadhanastava* として編纂されたか、抜粋されたもの。3) *Deśanāstava-vṛtti* (8世紀) に一部が引用されたもの。あるいは、Sthiramati (6世紀) が *Mahāyānasūtrālamkāra* 注釈中で Kṣāranadī として念頭に置いている経典が、これらとは別に存在する可能性もある。

したがって、Kṣāranadī には同名で異なる内容をもつ複数の経典があると予想される。あるいは、Kṣāranadī とは複数の経からなる複合的な経典である可能性もある。前者であれば、1177経が伝承の過程で変容したり増広された結果、複数存在するに至ったという仮説が立てられよう。しかし先の3テキストを比較する限り共通する記述はなく、それは証明できない。Hartmann 氏も述べるように⁴¹⁾、Kṣāranadī という経典は別名で伝わっている可能性もあり、今後はここで具体的に挙げたテキストを手がかりに諸経典に当たっていく必要があるだろう。

1) Hartmann, J.-U. (2007) "Der Sattvārāadhanastava und das Kṣāranadisūtra," *Pramāṇakīrtiḥ*, 1, Wien, pp.247-257. 2) P no.5429: *Ba tshva'i chu kluṅ zēs bya ba'i mdo las 'byuṅ ba // Sems can mgu bar bya ba'i tshigs su bcad pa bcu gcig pa slob dpon 'phags pa Klu sgrub kyis phyuṅ ba rdzogs so //*.

プトゥンの目録にも、*Ba tshva'i chu kluṅ gi mdo las btus pa Sems can mgu bar bya ba'i bstod pa* Nag tsho'i 'gyur / (no.931: 西岡祖秀 (1981) 『『プトゥン仏教史』目録部索引Ⅱ』, 『東京大学文学部文化交流研究施設紀要』, 5, p.65.10-11) とあるが、これはタイトルや翻訳者から no.2017 のことであろう。3) Lévi, S (1929) "Autour d'Āśvagoṣa," *Journal Asiatique*, 215, p.265.3-4. Pandey, J. Sh. (1992) "Sattvārādhana-gāthā," *Dhīh*, 14, pp.1-2: iti samyak-sambuddha-bhāṣita-Sattvārāadhanagāthā samāptā // (samyak-sambuddha-bhāṣitā Sattvārāadhanagāthā samāptā /: digital text, www.uwest.edu/sanskritcanon, *Bauddha Stotra Samgrah*, Varanasi, 1994, Stotra section, no.100).

4) 高崎直道 (1974) 「『菩薩藏経』について」, 本誌, 22-2, pp.46-54. 「菩薩藏」が何を指すのかに関して、Pagel 氏はその語に言及するテキストを大きく3つに分類する (Pagel, U. (1995) *The Bodhisattvapīṭaka*, Tring, U.K., p.7.11-24, Braarvig, J. and Pagel, U. (2006) "Fragments of the Bodhisattvapīṭakasūtra," *Buddhist Manuscripts*, 3, Oslo, p.21.16-19). 本稿の場合は (I-2) 「Bodhisattvapīṭaka の語を特に大乘経典に適用する論書」だと考えられる。5) Pradhan, P. (1967) *Abhidharmakoshaḥbhāṣya of Vasubandhu*, Patna, p.164.6, 山口益, 舟橋一哉 (1955) 『俱舍論の原典解明 世間品』, 法蔵館, p.384.10-11. 6) この河は次の諸文献にも触れられる (一部は Lamotte, É. (1949) *Le Traité de La Grande Vertu de Sagesse de Nāgārjuna*, 2, reprint Louvain-la-Neuve, 1981, p.962.n.4 による). *Majjhimanikāya* (khārodakā nadī: Chalmers, R. (1899) *The Majjhimanikāya*, 3, London, p.185.28), *Suḥṛllekha* 73 (dmyal ba'i chu bo rab med par // tsha sgo bzod brlag (blags Pema) chu tshan, 塩分を含み耐え難く水が熱い地獄の Vaitaraṇī 河: Pema

- Tenzin (2002) *Suḥrillekha of Ācārya Nāgārjuna and Vyaktapadāṭikā of Ācārya Mahāmati*, Vārāṇasī, pp.180.9–181.2), *Sūtrasamuccaya* (thal tshan gyi chu kluṅ, 熱い灰の河: Pāsādika, Bh. (1989) *Nāgārjuna's Sūtrasamuccaya*, Copenhagen, pp.58.2–60.21; 灰河地獄: 大正 1635, p.58a12–b25), *Sikṣāsamuccaya* (kṣāraṇadī-taraṅgiṇī, kṣāraṇadī: Bendall, C. (1902) *Śikṣhāsamuccaya*, St.Petersbourg, 1897–1902, p.75.10–11, 14), 大智度論 (鹹河, 沸鹹河: 大正 1509, pp.176c11, c23, 185b5), 十住毘婆沙論 (鹹河地獄: 大正 1521, p.21a21). この河と実在の Vaitaraṇī 河との関連が牧達玄 (2001) 「「灰河地獄」に関する一二の問題」, 『仏教学浄土学研究』, 永田文昌堂, pp.121–133 で考察されている. 7) tshva P / tsha D
- 8) P no.5527, phi208b1; D no.4026, phi192a6. 9) ba D / om, P 10) P no.5531, mi302b8; D no.4034, mi271a6. 11) 小谷信千代 (1984) 『大乘莊嚴經論の研究』, 文英堂, pp.253.27–254.4. 12) Tatz, M. (1985) pp.19.31, 50.2. 13) 藤田祥道 (2006) 「大乘の諸経論に見られる大乘仏説論の系譜」, 『インド学チベット学研究』, 9/10, p.28.
- 14) 『出三蔵記集』 (大正 2145, 510–518 年成立) に「灰河経一卷, 塵土灰河譬喩経一卷」 (p.30c15–16) とあり, 両者のいずれかがこの経典に相当すると考えられる. 15) すでに長尾雅人 (2007) 『『大乘莊嚴經論』和訳と註解』, 2, 長尾文庫, p.268.n.4 に, 所引の「『灰河経』は」この 1177「経に相当する」とある. 16) Lévi, S. (1907) *Mahāyānasūtrālamkāra*, 1, Paris, p.93.16–17, Lévi, S. (1911) *idem*, 2, p.166.20–22. 17) tham pa P, D / tha ma ba 小谷 18) zes bya ba'i P / zes bya'o zes bya ba'i D 19) P mi303a1–2, D mi271a6–b1; 小谷信千代 (1984) p.254.3–9. 20) *ibid.* p.167.6–10.
- 21) 『僧伽羅刹所集経』 (大正 194, esp.p.124b22–c21), 『無明羅刹集』 (大正 720, esp. pp.850a19–851a13): 藤田祥道 (2006) p.29.15. そもそも 1177 経は, 能仁正顕 (2002) 「菩薩思想の形成と展開」, 『親鸞と人間』, 永田文昌堂, p.195.4–17 に指摘されるように, 「篋毒蛇」経すなわち 1172 経 (大正 99, pp.313b14–314a1; パーリでは *Samyuttanikāya* XXXV-197, *Āsivisa*), あるいは『増一阿含』 31-6 経 (大正 125, pp.669c2–670a20) をふまえて作成されており, ルーツはこちらにあると言えるが, 1172 経では「一大河」 (p.313c1; mahā udakaṇṇava: Feer, M. L. (1894) *Samyuttanikāya*, 4, London, pp.174.5–6, 175.11), 31-6 経では「大水」 (p.669c25) とあるのみで「灰河」という呼称は未だみられない. 22) *Caṅgisūtra* に関しては Hartmann, J.-U. (2007) p.250.n.12 に触れられる. dhammanijjhānakhandi: Chalmers, R. (1896) *The Majjhimanikāya*, 2, London, pp.173.21–22, 175.3–15. 本経の和訳: 片山一良 (2000) 『中部 中分五十経篇 II』, 大蔵出版, pp.423–446. その他の経論に関しては早島理 (1982) 「Dharmanidhyānaksānti」, 本誌, 31-1, pp.59–62 に詳しい.
- 23) 英訳: Tatz, M. (1985) *Difficult Beginnings*, Boston, etc, pp.50.2–11, 50.27–31, 56.26–57.6. 24) *ibid.* p.17.13–31. Tāraṇātha の仏教史や *dPag bsam ljon bzān* によれば, 同時代人として Buddhaguhya, Khri sroṅ lde btsan, Kamalaśīla, Hariḥbhadrā などの名が挙げられる. Schiefner, A. (1868) *Tāraṇāthae de Doctrinae Buddhicae in India Propagatione*, Petropoli, pp.166.16, 22, 169.19, 171.9, 15; Candra Das (1908) *Pag Sam Jon Zaṅ*, Calcutta, pp.113.5, 13, 16, 114.10, 20, 22, cxxxiii.20–25. ただ Tāraṇātha で Khri sroṅ lde btsan (第 38 代王) とあるところが, *dPag bsam ljon bzān* では Khri lde'u btsug brtan (Khri lde gtsug brtan, 第 37 代) とされる個所があり (Schiefner, A. (1868) p.171.8–15, Candra Das (1908) p.114.11–22), 伝承の混乱がある.

(130)

Kṣāranadī という謎の経典について (津 田)

第 37 代王の在位は 8 世紀前半, 第 38 代は 8 世紀後半であり, いずれにしても *Buddhaśānti* は 8 世紀の人物とみて問題ないだろう.

- 25) *tshva'i* D / *tsha'i* P,N,C,G 26) *yod*
D / *yin* P,N,C,G 27) *bzañs* D / *bzañ* P,N,C,G 28) *bsags* P,D,N,G / *bsag* C
29) *gis* P,N,C,G / *gi* D 30) *po* P,D,C,G / *pho* N 31) P *ka243a6-b1*, D *ka208a4-5*,
N *ka228a1-3*, C *ka241b1-3*, G *ka299a1-4*. 32) *'bab* P,D,N,G / *'babs* C 33) *'dba*
D,N,C,G / *'dpa* P 34) *ba'i* D,N,C,G / *pa'i* P 35) P *243b5-6*, D *208b2-3*, N *228a6-8*,
C *241b6-7*, G *299b1-2*. 36) *tshva'i* D,N / *tsha'i* P,C,G 37) *sred* D,N,C,G / *srid* P
38) *tshar* P,D,N,G / *cher* C 39) *ñam* P,D,N,G / *ñams* C 40) P *246b3-5*, D *211a2-*
3, N *231a2-4*, C *244b5-7*, G *303a2-4*. 41) Hartmann, J.-U. (2007) p.250.9-16.

〈キーワード〉 *Kṣāranadī*, 灰河, *Sattvārādhana*, *Nāgārjuna*

(京都大学大学院修了, 博士 (文学))

新刊紹介

高崎 直道 監修 桂 紹隆・斎藤 明・下田 正弘・末木 文美士 編

『大乘仏教とは何か シリーズ大乘仏教 第1巻』

A5 版・300 頁・本体価格 2,800 円
春秋社・2011 年 6 月